

### <新刊紹介>勝又浩編 『中島敦』

梅澤, 亜由美 / ウメザワ, アユミ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

119

(終了ページ / End Page)

119

(発行年 / Year)

1993-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019682>

勝又 浩編

## 『中島敦』

梅澤 亜由美

〈昭和作家のクロノトポス〉とされているように、編者は「〈クロノトポス—時空間〉を基調とし、作家をその生きた時間と空間・社会・環境・歴史・伝統の場に置き考える」という姿勢をとっている。その姿勢の裏には編者の「流行理論の応用競べに走りがちな現在の文学研究を、文学的実感のともなう」生きた作家と作品の読み」という初心に戻すことにより、今後の文学研究に一つの方向性を示したい」という思いが込められている。

本書はその第一冊として、昨年没後五〇年

を迎えた「夭折の鬼才」中島敦を取りあげたものである。

構成は、I作家の〈時間〉、II作家の〈空間〉、III作家の〈歴史〉、IV作家の〈時代〉の四章から成っている。そして各章の中では、二十二人の研究者による多角的かつ個性的な「中島敦論」が展開されている。

各章の内容を軽く紹介しよう。I〈時間〉では、中島の生い立ちに由来する漢学の家系を論じることから始まり、作家—中島に影響を与えたと思われる、朝鮮・中国体験、横浜時代、南洋体験についてが論じられている。

II〈空間〉では、ヨーロッパ、アジア、中国、キリスト教との関わりが論じられる。続いて、中島の愛読書であった「トニオ・クレーゲル」を軸にトーマス・マンとの関わりが論じられ、最後に、荒正人の言う「中島の『愛』についての「落丁」」を軸に、中島文学と女性についてが論じられている。

III〈歴史〉では、鷗外、漱石、耽美派、芥川といった中島が当然影響を受けていたと考えられる作家を軸とし、中島を検討してい

る。そして最後に、「中島敦の〈私小説性〉」として、昭和一〇年代文学としての中島が論じられている。

IV〈時代〉は、「サーティワンの思考」として中島における昭和一二年の和歌の創作に注目した論にはじまり、続いて、横光利一、堀辰雄、梶井基次郎、石川淳、太宰治、坂口安吾といった、ほぼ中島と同時代と言える作家を視座とした論が並べられている。

これだけの多様な視点を揃えた作家研究は、おそらく稀なのではないだろうか。単独の研究者では不可能であると考えられる点を、本書は各領域を専門とする執筆者を揃えることにより可能にしている。

中島敦という一作家の基本的枠組と多角的検討とを、共に捉えることが可能となる新しい試みの一冊である。

(うめざわ あゆみ・大学院修士課程二年)

(一九九二年十一月・双文社出版刊・三八〇〇円)

▽編者II文学部教授。